



大学院 25 周年に寄せて 目次  
芽生え ～開学の頃の図書室…p1  
伸びゆく木立…p2  
知の森に集いて…p3  
実り ～修士・博士論文…p4

## 大学院 25 周年に寄せて



### 芽生え ～開学の頃の図書室



図書館キャラクター「しおりちゃん」

大学院図書室は、1993 年の大学院開設と同時に開設されました。当時は大学院そのものが小さな建物でしたので、大学院図書室も小さなものでした。

しかしながら、人文社会系の大学院の研究指導の根幹が資料の検索と閲覧にありましたので、小さいながらも大学院図書室としての機能を備えるいろいろな工夫をしておりました。開学当時は、図書館職員は 1 人と学生のアルバイトで、大学院事務長が図書館業務も見るという体制でしたが、それにもかかわらず院生にとっては身近な機関だったと思います。

とくに、当初から司書が院生に親身になって資料の相談に乗るという仕組みと習慣が確立したので、規模のわりには院生にとっても満足度の高い状態だったように記憶します。そして、それはそのまま現在の大学院図書室の伝統となっています。

(図書館長・人間科学部教授 岡本浩一)



開設時の大学院棟



現在の大学院棟



## 伸びゆく木立

### 初期の大学院生の方々

熱意ある学生との出会いによって大学院の25年間は、私にとって大変充実していました。

たとえば宗教学分野の荒井英子さんは修論を基にして『ハンセン病とキリスト教』（1996）を、そして没後に遺稿集として『弱さを絆に—ハンセン病に学び、がんを生きて』（2011）を出版されました。また緩和医療の奥野滋子さんは『ギルガメシュ叙事詩』に関する修論を仕上げ、その後も『ひとりて死ぬのだって大丈夫』（2014）など多くの本を出版されています。（人間科学研究科教授 渡辺和子）

### 「草創期」大学院の思い出

大学院草創期の思い出は、夜間授業が午後8時に終了後、“セカンドセミナー”と称して院生有志を伴い、近くの赤提灯に繰り出したことだ。ここでは改めて講義内容を深く議論するとともに、今度は院生から私が社会の実相について講義を受けることにあった。当初は20名以上の受験生から厳選されたエリート生、しかも教員、官僚、サラリーマンなど社会の縮図のような幅広い人材であり、きわめて有意義な時間であった。

大学院の終了時間が9時40分に変更された結果、皆帰宅時間を気にして、このセミナーは自然消滅したが、今も交流が続いているOB・OGとの絆は、このセミナーでの親交から生まれたものといえる。

（元・国際協力研究科教授 増田弘）



### 大学院の「宝」

私が大学院に関わるようになったのは平成10年4月、もう20年も前になります。

まだ40代で、教員としても「迷い」の多い時期でした。そんな私が、本学の博士「第2号」となる鈴木正子さんの「指導」を担当することになりました。

鈴木さんは広島大学の看護学教授を退官し、死生学の平山正実先生の下で精神疾患の方の葛藤をテーマにされていました。たった1例の方について徹底的に分析し、考察を極め、質的研究とはこうあるべきだ、ということをつたき込んでくださいました。実際、私が教えていただいたのですが、鈴木さんはいつも謙虚で、研究者たる者の本来の姿を示してくださいました。

社会人大学院である本学は、このような出会いが数多くあります。専門分野が異なる者同士が積極的に議論し、「学際的研究」の意義を実感できます。この東洋英和ならではの学びを「宝」として、これからも研究を深めていきたいと考えています。（人間科学研究科教授 石渡和実）



## 知の森に集いて

### 臨床心理学領域の歩み

10数年前を思い起こせば、以前は天井の低いコンクリートの匂いのする校舎でした。年を取ると「昔は良かった」という言葉が常套句となりますが、一部にその思いも否めません。でもそれ以上に好転した点多々あります。とにかく環境・設備はよくなりました。これから臨床心理学の分野は、国家資格の成立という新しい時代を迎えます。今以上に、systematicな教育体制が必要とされます。図書館にはこれからも研究へのサポートとしての役割を期待しています。

(人間科学研究科教授 臨床心理学領域  
角藤比呂志)

### 「図書室」という場

幼・小・中・高校と同じ敷地内に在った小学校に通っていた私は、小学3年生の国語の時間に、初めて(中高のお姉さん達の)図書室に行った。広い空間に整然と並ぶ硬質の表紙の本たち、天井の高さ、少し暗めの照明に、子どもながらも、非日常的で厳粛で神秘的な感じを強く持った。この感覚は、現在もそのままあり続けている。今も大学院の図書室に入ったとたん、日常的な役割から解放され、真理を追究する一学徒としての“わたし”と出会い、向き合える。今後も、大学院図書室が、院生さんにとって、図書を通した「知」の提供とともに、自己と向き合える貴重な「時空間」となっていくことを心より願っている。

(人間科学研究科長・教授 久保田まり)



### サンクチュアリ

と言ってもフォークナーや吉本ばななについて語るわけではありません。大学院棟の地下、まさに内陣に位置する図書室は、聖域ではないものの、その静謐さがサンクチュアリと称するにふさわしい雰囲気醸し出しています。しかし一方、院生はじめ利用者にとっては声なきものたちがひしめく狩猟場でもあります。決して禁猟区ではありませんので、思う存分、獲物を駆り出し、仕留めてほしいものです。

(国際協力研究科長・教授 望月克哉)

### 大学院の思い出と学んだこと

大学院の思い出は様々ありますが、特筆するところは少人数での教育により先生方・事務室・図書室の方々をはじめ多くの方々に恵まれ、親切にいただいたということです。また図書機能も充実しており、修論を書く上で大きな助けとなりました。

英和の大学院で学んでみてその意義としては、課題設定能力や問題に対する分析能力・検証能力がつくこと、様々な年代・職種の方々との交流が持つ貴重な人脈が作れること等があると思いました。このような良さを持つ、仕事を持ちながら通える社会人大学院というのは、貴重なものと思います。25周年を迎えられ、大学院の今後益々のご発展をお祈りしております。

(2010年国際協力研究科修了生、大学院同窓会会長 菅井徹郎)



## 実り ～修士・博士論文



### Master 修士論文提出数 (2018年9月現在)

人間科学研究科	665 編
社会科学研究科(1993年4月～2005年3月)	100 編
国際協力研究科(2005年3月～)	87 編
※研究成果を含みます。年月は学位授与年月です。	

### Doctor 博士論文一覧

- ☆甲第1号 大沼幸子. 苦痛と苦悩に対する創造的・多面的アプローチに関する研究. 2005
- ☆甲第2号 鈴木正子. 心筋梗塞により死に直面し怒りを呈する一人の強迫神経症病者の病む体験の研究. 2005
- ☆甲第3号 大西奈保子. ターミナルケアに携わる看護師の態度変容過程に関する研究：前向きにターミナルケアを捉えることができるための要因分析. 2006
- ☆甲第4号 宮崎喜久子. 緩和ケアにおけるQOLの現状と課題. 2006
- ☆甲第5号 小島ひで子. 親の喪失を意識した子どものグリーフケア：ターミナル期から死別後における現状と課題. 2008
- ☆甲第6号 網谷由香利. 心理療法を通して生じる子どもイメージ：「傷ついた治療者」の機能をめぐる分析心理学的一考察. 2009
- ☆甲第7号 小谷みどり. 葬送儀礼や墓の変容における「わたしの死」概念の影響に関する研究. 2009
- ☆甲第8号 石濱照子. 現代の社会病理現象としての自殺に関する人間科学的研究：「追い込まれた死」の視点からの考察. 2014
- ☆甲第9号 河村従彦. 日本人キリスト者の神表象研究：Wesley理論に基づく教会教育の視点から. 2016

\*1号、8号、9号は図書館ウェブサイト「東洋英和女学院大学学術リポジトリ」>「博士論文」で公開しています。



“学位授与式” ～成し遂げた喜びと別れの寂しさ・・・



(編集担当：大学院図書室 横田)